

＜第79回ニッポンクラウドワーキンググループ会合＞
MCP/A2Aの活用 部会メンバー発表

アシロボのAI活用をアシロボ開発者に聞いてみた。

株式会社ドヴァ 井口和彦







会社概要

社 名	株式会社ドヴァ	資本金	50,000,000円
設 立	1998年10月28日	ISMS登録番号	JP13/080269
代表取締役	土橋 整	ISMS適用規格	JIS Q 27001:2023 (ISO/IEC 27001:2022)

- 本社所在地 〒220-8117 横浜市西区みなとみらい二丁目2番1号 横浜ランドマークタワー17F
- 沖縄オフィス 〒901-2122 沖縄県浦添市勢理客四丁目19番3号 NTTコム那覇勢理客ビル6F
- 福岡オフィス 〒810-0041 福岡県福岡市中央区大名二丁目6番11号 Fukuoka Growth Next

事業内容

ICTサポート

- ソフトウェアサービス（ソフトウェアの企画・開発・販売）
- インフラストラクチャーサービス（電気通信事業【電気通信事業 届出番号：A-12-3910】）
- プラットフォームサービス（ICT基盤の設計、構築、運用、保守）
- マーケティングサービス（インターネットマーケティング支援）
- コンサルティングサービス（M&A支援、ファイナンス支援、FP&A支援）

ICTプロダクト

- アシロボ®（RPA）
- シーサーガード®（データ貸金庫サービス）
- Lux Line®（回線サービス）
- データセンター（ハウジングサービス）
- 機器調達

企業理念

Corporate Identity

MISSION

世界のギャップを技術で埋める

私たちはテクノロジーの力で、
いかなる人でも諦めずにチャレンジできる社会をつくれます。



VISION

常に「求められる」存在になる

幅広い領域に対応する職人集団となるべく、
技術革新を止めずに自己成長を続けます。



VALUE

寄り添う

相手、物事に真摯に向き合い、そばにいます。

プロフェッショナル

常に相手が求めているものを考え、
安定したクオリティを提供し続けます。

必要最中限

合理性と実用性を鑑みて、最適解をともに考えます。



**英国空軍が戦地から戻る際に
ドーバーの白い崖が見えると
なんとか本国へ戻れる逸話から
ドヴァを見つけていただければなんとかします。
が社名の由来です。**



つながり方は様々ですが通信はなくなりません。



**事業を継続していく為に通信は家庭における
ガスや水道、電気のように
無くない領域で重要なインフラです。**

**しかし情報通信インフラはITの中でも地味でしんどくて面倒で
障害の際に真っ先に原因にされてしまいます。**

**そんな地味で、しんどくて、面倒な
みんながやりたがらない
情報通信インフラ構築を
進んでやるのが私たちです。**

本来の得意領域だけに専念したい



Sler様



ベンダー様

より多くの製品販売に集中したい

ワンストップでサービスを受けたい



ユーザ様



ドヴァ

皆様のICTコンシェルジュとして
様々なご要望にお応え出来ます

**あなたの仕事の隙間を
お埋めします。
どーん！**

すべて
ロボットに
おまかせ!



ルーティンワーク

メシア

定型業務の救世主

アシロボ®

メール送受信

エクセル操作

Webデータ収集

自社システム操作

など

月給
5万円

祝
1,300
契約

継続率
98%

AI = 脳

自分で考え、学習、推論、
問題解決などの能力を持つ。



RPA = 手

ルールと手順が決まっている。
人間の作業を自動化する技術。



記録されたデータ（楽譜データ）に基づいて
鍵盤を自動で押す

自動演奏ピアノ の パソコン版



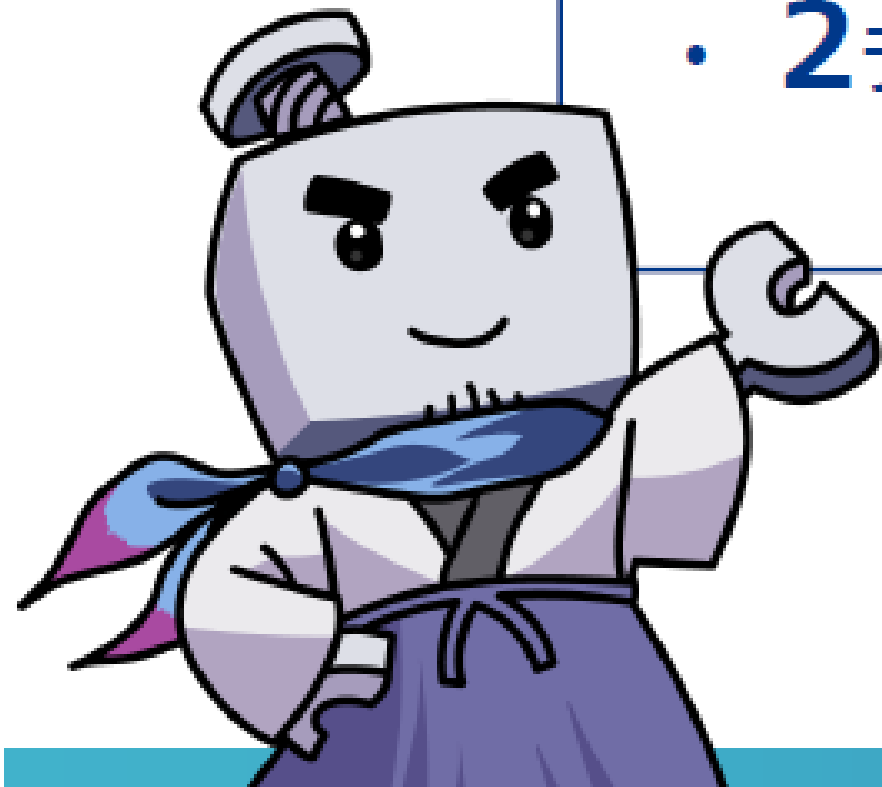
ドミソ♪



クリック→開く→転記→Enter



- ・ シンプルで分かりやすい画面設計
- ・ リアルタイムセミナーが 無料で何度でもご受講可能
- ・ アシロボを熟知した窓口による 迅速なサポート
- ・ 2ライセンス/月5万円のコストパフォーマンス



まずは1カ月無料体験版をぜひお試しください！



アシロボのAI活用を アシロボ開発者に聞いてみた。

アシロボ自体にAIの機能は搭載されていないため
直接的なMCP連携ということは現状できませんが、
MCP連携しているAIツール自体をアシロボで操作することはできます。
MCPを使ってシステムとのAPI連携等はできるかもですが、
それだけでは補えないシステム連携をアシロボを使って補佐することで共存できると考えます。

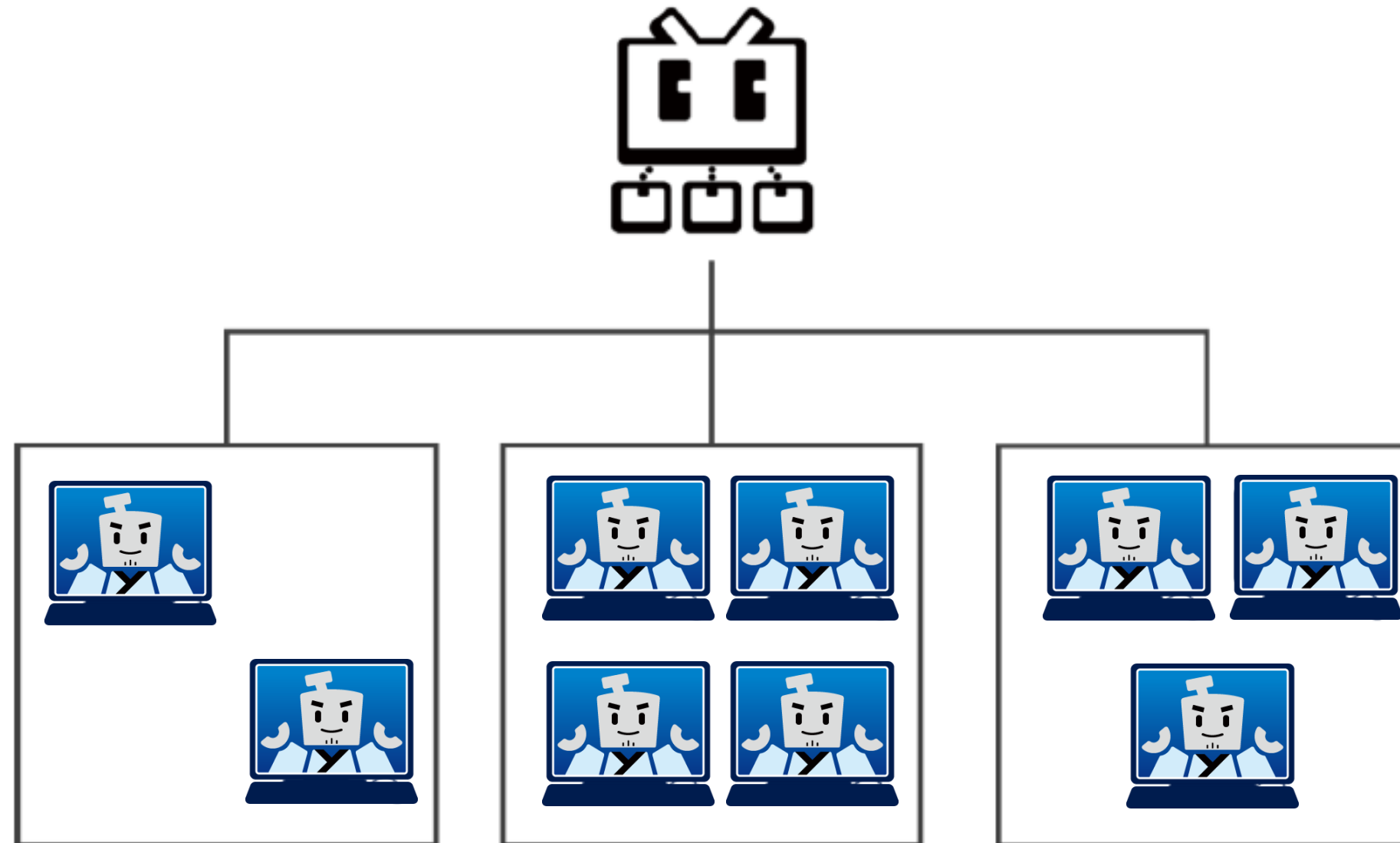
アシロボのMCP連携となると、アシロボがエージェントとなり、おそらくAIがアシロボのシナリオを動的に実行するという形になると思います。MCPをするには、アシロボには外部から接続して指示を受け取るAPIなどが必要となりますが、今はまだ、アシロボにはそういうAPIがないです。そのため、AIが直接アシロボに「シナリオ実行」指示を出すことはできません。

しかし、ロボミニストレーター経由なら、理論上可能です。MCPを使ってブラウザを操作し、そのブラウザからロボミニストレーターを操作し、ロボミニストレーターからアシロボにシナリオを実行してもらう、という流れになるかもしれません。

より直接的に、アシロボをAIの手足にしたい場合は、アシロボのAPI、ロボミニストレーターのAPIを開発するべきかもしれません。

ロボミニストレーターについて

ロボミニストレーターとは、ウェブブラウザから多数のRPA 端末を一元管理できるソフトウェアです。RPA アプリをインストールした端末と通信し、それらの稼働状況、シナリオ一覧、スケジュール一覧などを遠隔から確認および設定を行う事ができます。ロボミニストレーターのウェブ画面から、RPA 端末ごとにユーザやグループのアクセス権限を設定することもできます。



アシロボ × MCP連携の可能性

自然言語インターフェース

生成AI経由で「伝票処理を実行」「月次レポートを作成」と依頼 →
MCPでアシロボ呼び出し → 自動実行

動的シナリオ選択

AIが業務コンテキストを解析し、適切なアシロボシナリオを選定・実行

メリット

シナリオ呼び出しをユーザー操作からAIトリガーへ移行
現場業務をさらにシームレスにAI／RPA化

アシロボ × A2A連携の可能性

複合AIサービスとの組み合わせ

AI OCRで書類データ抽出 → アシロボが基幹システム登録 → 別AIが要約・分析

AI対話 × RPA

AIチャットボットが顧客要望を解析 → アシロボが処理実行 → AIが自然言語で回答返却

メリット

「知能（AI）と実行力（RPA）」をA2Aで一気通貫

各社サービス連携による全体最適化

今後の展望

ハイブリッド連携：APIがある場合はA2A、無い場合はRPA、両者をMCPで統制
セキュアなガバナンス：MCPでアクセス制御、ログ管理、コンプライアンス対応
自動化プラットフォーム化：アシロボがAIと他サービスのハブとして機能

アシロボは、MCP／A2Aとの連携によって
“単なるRPA”から“企業全体の自動化基盤”へ進化できる。

知能を持つAIと、実行力を持つRPAを、MCP／A2Aがつなぐことで、
自動化は次のフェーズに入ります。

MCPはアプリケーションとして使うには不可欠なものだと思います。まさにデファクトでも、A2Aは結果的にそれに規制をハメることで産業化を推進することになるのですが、一方で可能性を制限することにならないか、ということを懸念します

A2Aの期待と懸念点

1. A2A（Agent-to-Agent）プロトコルとは？

目的：異なる開発元によって作られたAIエージェント同士が「会話」し、
協調作業を行うための標準規格（いわば共通言語）。

役割：AIが外部ツールを使うためのMCPに対し、
A2AはAI同士の対話を担い、より自律的で高度なAIシステムの構築を可能にする。

2. A2Aがもたらす期待（メリット）

相互運用性の向上: 特定ベンダーに縛られず、最適なAIを自由に組み合わせることが可能に

開発効率の向上

連携のための個別開発が不要になり、開発コストを削減。

イノベーションの促進

**異なる能力を持つAIエージェントの組み合わせから、新たなサービスが生まれやすくなる。
一人ひとりの主体的な参画にかかっていると考える。**

3. 懸念される「囲い込み」のリスク

背景：A2Aはオープンな規格だが、巨大IT企業が主導することで実質的な市場支配（囲い込み）につながる危険性

シナリオ1：デファクトスタンダード（事実上の標準）化による主導権

巨大IT企業が自社プラットフォームとA2Aを深く連携させ、市場の主導権を掌握

- エコシステムに最適化されないAIが不利になる「見えない壁」が発生する恐れ

シナリオ2：エコシステム全体でのロックイン

- プラットフォーム依存: 特定のクラウド基盤、AIモデル、開発ツールから離れられなくなる
- 独自拡張: プラットフォーム独自の便利な拡張機能や「お作法」が、他への移行を困難にする
- データのサイロ化: データが特定プラットフォームに集積し、移行コストが参入障壁となる

シナリオ3：高度化・複雑化による参入障壁

- マルチエージェントシステムの高度なセキュリティや運用管理には、莫大なリソースが必要
- 結果として、対応可能なのが巨大IT企業に限られ、中小・スタートアップの参入が困難に

4. 「囲い込み」がもたらす将来への影響

イノベーションの停滞: 公正な競争が失われ、破壊的なイノベーションが生まれにくくなる

選択肢の減少: ユーザーや開発者が、特定のプラットフォームやサービスに縛られる

市場の寡占化: 新規参入が阻害され、巨大IT企業による市場支配がさらに進む

5. 結論：オープンな未来に向けた我々の役割

A2Aの輝かしい未来が、一部の企業による

「閉じた庭（ウォールド・ガーデン）」にならないためには、単に動向を監視するだけでは不十分

コミュニティの積極的な関与が不可欠

開発者、研究者、利用者である私たち自身がコミュニティとして、

標準化プロセスやエコシステムのあり方に主体的に関わり、

コミットしていく必要があるのではないか

よって、AI社会の健全な発展は、私たち一人ひとりの主体的な参画にかかっていると考える。

